

SD-OCTによる 緑内障解析の Breakthrough

2013年9月22日(日) 12:00~13:00 (予定)

会場:京王プラザホテル 第1会場 (エミネンス)
(700席 ※予定)



座長

新家 眞 先生
関東中央病院

Spectral domain optical coherence tomography (SD-OCT)の登場により、網膜疾患のみならず緑内障の診断にも大きな進歩が近年起こりつつある事はいうまでもないが、緑内障へのSD-OCT応用に関して最近2つのBreakthroughが有ったように思う。

1) 一つは視神経乳頭縁の定義がSD-OCTの登場によりヘルムホルツの検眼鏡以来百何十年ぶりになるかも知れないと言うことである。Bruch膜の開口部をとって視神経は眼外に出て行くのであるが、従来は検眼鏡的(眼底写真上の)な視神経乳頭縁とそれは大体一致すると仮定されていた。しかしSD-OCTに依り始めて正確にその位置が生体眼で同定できるようになったBruch膜の開口部と検眼鏡的な乳頭縁との間にはズレが有ることが明らかになりつつあり、視神経乳頭縁をBruch膜の開口部と定義して種々の解析を行った方が、理論的にも実際的にも色々都合のよいらしい事が報告されつつある。

2) 二つ目には緑内障における黄班部網膜変化の再認識である。従来緑内障では中心視野部分(即ち黄班部網膜)は早期には余り変化を受けないと考えられてきた。しかし近年のSD-OCTによる検討で、緑内障では黄班部網膜は視神経乳頭周囲の網膜神経線維層と同様に早期から変化を受ける事が明らかとなりつつある。黄班部網膜は視神経乳頭及びその周囲の網膜と違い、SD-OCTによる測定及びその解析が、技術的にも遥かにやり易いという利点があり、緑内障を視神経乳頭部を一旦離れて黄班部網膜の変化と言う観点からみてきた色々興味ある知見が報告されている。

上記1)と2)に関して、Chauhan先生と板谷先生にお話しただけの機会を得たのは真に幸甚であると言わざるを得ず、必ずや聴衆の皆様とともに、「目から鱗」のセミナーを期待したい。



演者

**SD-OCTによる
視神経乳頭解析の
Breakthrough**

Dr. **Balwantray
C. Chauhan**
Dalhousie University



演者

**SD-OCTによる
黄斑解析の
Breakthrough**

板谷 正紀 先生
久留米大学